



お話大臣 (つゞき)

太田英隆譯

○第三 魔術使ひ

花太郎は、王に對ひ

「王様よ、よく聞きなされ、今説き續く談柄は、昨日語り残したる文雄が妖怪に、今や殺されんとせる餘談でムります。」

と云ひて、昨日の話續きをいたすべくとり蒐り

ました。すると王は、待ち兼ねし様子にて

「を、儼の話を聞かうと思つて、昨日から時計

ばかり見て、早く今日の來るのを待つてゐた、朕

は今迄多くの人に、話はいろく聞いたが、儼の

やうな話口調の旨いものは知らない、又昨日の談

話も餘程面白さうだ、早く彼の續きを話して呉

れ。」

と奨められますから、花太郎は、まづ二ツ三ツ口

咳しつゝ居直つて、言葉巧みに説き出しました。

却説、かの妖怪が決心して氷の刃振り上げ、今

や文雄の首は落やうとしました、この時一人の老

翁が、一疋の牝鹿に乗つてこゝに飛んで参りました。

老翁はこの有様を看まして、すぐその刃の下

に行き

「まづお待ち下さい。甚麼な事情かは存じません

が、その刃をしばらくお納めなさつて下され。」

と取り纏るやうに頼みますと、妖怪は大音を上げ

「爾は何故邪魔するか。このものは、俺が弟子を多く殺せし罪があるから、今仇を討つのである、そこ逃げ。」

と又も斬らうとします。かの老翁は、吾れを忘れて妖怪の足下に滾び行き、身を伏して妖怪の足を口もて吸ふやうにして

「噫我が魔王よ、暫らく待ちたまへ、その忿怒を鎮めて俺が云ふ辭を聞きたまへ、俺はいまこの牝鹿の成立を委しく語つて聞かせます、この話は、世間にありふれた話とは異ひ、餘程珍らしきことであります。もしこれを聞きたまは、必然驚き怪しまないでありますやう、耳を聞んと申し玉は、この人の罪を宥して下さる。」

と兩路かけて云ひますと、妖怪は稍暫く首を傾けて考へてゐましたが、

「那麼では、甚麼話か知らないが、兎も角も話の終るまでは宥してやる。而して、性命は三分の一宥して、首を斬る所を、脚と手を斬つて之れに代へてやる。」

と申します。老翁はすぐ話にかゝりました。

魔王よ聞き玉へ、これなる鹿は私の妻で、います。この妻を嫁りましてから、十五年の光陰を経ちましたが、一人の子も出来ないのです。それで、一人の妾をおくことにしました。しばらくしますと玉の様な男子が生れましたから、嚙んで愛しますと、元來嫉妬の心深いこの妻は、その母と子と大層悪みましたのです。

不錯する内に、私は所用の爲め、半年ほど旅立

することになりました。妻は私の留守を幸ひ、今こそ日頃の怨恨を晴す折りと思つてか、我が子を人のゐない所に連れて行つて、かねて知つてゐた妖術を以て、小牛と化し農夫に養はしめ、猶飽き足りないで、妾を同じ法で牝牛と化し、之れも農夫に與へました。

私は、這麼出來事のあるとは感知らず、久しぶりに家に歸つて、我が子の顔を見やうと思つて尋ねますと、妻は

『わの子は、二月前不圖家出せしまゝ、今に行衛は知れませんが、又母親は、それを苦に病んで死にました。』

と空涙を流して語ります。私はそれを誠に思つて、只その子に又會ふこともあらふかと那麽を頼みにしてゐました。

折しも恰度、回々教の大祭日になりましたから、牛を屠つて神様に供へやうと思つて、農夫の家から一疋の牝牛を求めました。その牝牛を屠らうといたしますと、牛は大層悲しき泣き聲を出して、涙を雨の如く流します。私は何だか、その様を見ると俄に悲しくなつて、什麼しても之を屠ることは出来ません。それで、農夫に命じて之を屠らせ其肉を見まするに、太く瘦せて食べられないのですから、之れを貧民に施して、又一匹の肥へた小牛を曳き來らせました。

今曳いて來た小牛は、私を見ると足下に纏はり、首を土地に摺り付けて、恰度子供戯れるやうなことをします。而してこの小牛が愛憐くなつて、什麼しても殺す氣になれませんが、他の牛と代へるやうに農夫に命じました。すると妻は、不興

氣に口を尖らして、

『夫は何故今日はそんな事ばかり宣つて、牛を屠らないのでありますか、そんなお氣の弱いことでは、何も出来ませんよ。』

と常になく責めますから、私は訝しと思ひました
が、さまで心に留めず、要らざること云ふなど叱りまして、犢牛を農夫へ連れて歸らしました。

翌朝になりますと、昨日の農夫が遣つて参りまして、密々に申上げたき要があるから、すぐ來て下されと申しますので、私は推参しました。すると彼の農夫は、聲低そめて云ふには

『旦那、私には御承知の通り、今春十六になつた娘がいます。この娘は何所から教を受けましたものか、不思議な術を覺へまして、昨日旦那の御宅から曳いて歸りました、あの犢牛は人間の化し

たのだと云ふことを知りました。』

これを聞いた老翁は、不思議さうな顔つきで『何と妙なこともあるものだね。併し私には理由が解らないが、其仔細を聞かしては呉れまいか。』と申しますと、農夫は

『それをお話しいたさうと存じまして、お招きしたのでいますから、静にお聞きを願ひます。エヘン、恙うなのでいます。昨日の犢牛は旦那の最愛の御息でありまして、奥様が惡み嫌ふの餘り、魔術を以て化したのでいます。又已に屠つた彼の牝牛は、御息の母親であります、これと同じ術で、世にも淺ましき姿と變らせ、現世からなる畜生道に陥しいれたることを、我が娘が知り得たのでいます。』

老翁は右の話を語り向云ひますには、我が魔王よ、私が農夫よりこの事を聞いたとき驚き、否喜びはどの位であつたでせう、お察し下さい。私はこの事を聞や否急いで、娘の静枝に向つて、

『静枝さん、貴女は我が子息を再び、人間に化する術を知つてゐますか、知るなら什麼か元の人間にして下さい。』

掌を合せて頼めば、娘は笑ひながら

『卑妾は、その術を學びましたから、人間に化するのほすぐ出來ますよ、それでは早速蒐りませう。』

と云つて魔術にかゝりました。登下娘は、神酒徳利に酒を盛りたるを持つて來て、咒文を三回唱へ、次に犢牛に向ひ、

『嗚呼犢牛よ、汝は元來人間に創造れながら、僅

か魔術の爲めに、其形を犢牛と化せられたものである。今妾は、天帝より許されて、汝を復の人間となす。』

と云ひながら、徳利の酒を犢牛に注ぎかけますと、不思議にも犢牛は、見る間に元の人間になりました。

この時の私の喜びは、天にも登る心地して小踊りいたしました。その喜びは、とても只今口には説べることはできません。

その後、我が子息と娘の静枝とを、夫婦とさせて、その婚姻の式を行ふときに、娘は魔術を以て、我が妻を牝鹿と化して、今までの罪を罰しました。この牝鹿は、即ち私の妻でいます。

さうしまして、新夫婦は和睦しく暮してゐましたが、新婦は不圖疾病の爲めに死くなりました爲

め、子息は、それを悲しみ、遂に何所ともなく家出をせしま、今に踪蹟が知れないのでういます、それでももしや逢ふこともあらうかと思ひまして、諸國を廻つて居ります内、今日不圖この場に逢つた次第であります。

今迄語りましたことは、何んと珍らしい物語でムいませうと、恐々ながら妖怪の機嫌什麼と伺ひますと、妖怪は、餘程の話好と見へまして、

「僮の話は中々面白かつたから、約束通りこの人の罪の三分の一を宥してやる。」

と申します。この時老翁は、其罪を全体宥すやうにと頼みましたが、少しも聞入れず、

「これより少しも罪は宥せない、無益な口出すな、さあ僮の腕を先きに斬るから、腕を出せ。」

と云ひながら、太刀を振上げて文雄の腕を斬りか

けました。

この時花太郎は、今日はこれで休みますと云つて、王様に一禮して下りました。

いそぶの話

人殺し

人殺をした人が、追手から追いかけられて、ナイル河の岸まで逃げて来ると、そこに一匹の獅子が居たので、これは耐らぬと、木によぢ昇つた。すると、上の枝に大きな蛇が居たから、こりや叶はぬと云ふので、いきなり下の河へ跳び込んだ。所が、河には鱒が居て、たゞ一口にがぶりと飲んで仕舞つた。人殺をする様な人は、地の上でも、空中でも、水の中でも助かりつこなしたといふ話

獅子と鱒